

## 民間交流と中日関係

### 王宝玲（東華大学）



「『出て行け。中国から出て行け。』私はその店員さんのお爺さんに怒られて、お店から追い払われてしまいました。」目の前に座っている相互学習の相手は、話を進めるうちに目に涙を浮かべました。

夏休みに日本に短期留学し、その機会を利用して、以前からメールで相互学習していた渡辺さんと会いました。心の中の冷酷な日本人のイメージと違い、非常に親切なお爺さんだったので、当初の私は渡辺さんに対し好感を持っていました。

挨拶の後、渡辺さんは中国での自身の体験を語り始めました。「私は1940年に中国のハルピンに行かされ、そこで子供時代を過ごしたんです。」そう聞いた途端、私は驚き、ある疑問が頭に浮かびました。

「あの、その時期は日中戦争だったのではないですか。」私はあまり話題にしたくない歴史のことを慎重に口にしました。

答えは自分の想像通りで、「そう。だから私達日本人の子供と隣の中国人の子供は犬猿の仲で、毎日喧嘩していました。」というものでした。

子供だった渡辺さんは戦争に参加していないとは言え、この話を聞いた後、何だか彼を憎み嫌う気持ちが湧いてきました。戦争による体の傷は治っても、心の傷は治りません。

渡辺さんを全中国人の敵と見なすべきか、私個人の敵か。

私は戦争に関わった全日本人が嫌いである一方、渡辺さんは中国のことを好きでいてくれています。「東京は私の故郷ですが、ハルピンは第二の故郷です。しかし40年後、再度中国に踏み入ってみたら、よく罵られましてね。」

渡辺さんは万里の長城に登っている際、足を怪我してしまったそうです。周章狼狽しているところに、一人の女の子が現れ、助けてくれました。彼女はそばの店の店員でした。そして彼女は渡辺さんを店で休ませました。しかしその時、思いもよらないことが起きました。

長い年月が経ってしまい、中国語もすっかり忘れ、日本語でしかお礼を言えなかった渡辺さんは、戦争のせいで日本を敵視している店員のお爺さんに怒鳴られました。

「まるで子供の時の喧嘩みたいだな。私、中国人の親切さを感じたと同時に、中国人の日本への憎しみもひしひしと感しましたよ。」渡辺さんは苦笑いしました。

そんな境遇に遭った渡辺さんの顔を見ていると、私は彼を嫌う気持ちがなくなり、逆に気の毒に思いました。彼は戦争とは何の関係もなく、むしろ自分も被害者なのです。戦争のせいで故郷から追い出され、一家団欒もできず、自分の仲間達とも別れさせられ、新しい国で友達を作るどころか、逆に毎日喧嘩ばかりの日々を送っていました。無邪気な子供に何の罪があるの？何故このお爺さん、いや、多くの中国人は罪のない日本人を敵視して報復したいの？

やられたらやり返すのは果たして正しいのでしょうか。互いに傷つけ合うだけで、何の解決にもならず、何も残らず、何も生まれないのではないのでしょうか。

私は中国人は戦争の歴史を心に刻むべきですが、憎しみの対象はきちんと区分すべきだと思います。戦犯に恨みを抱くのは分かります。その一方、一般の何の罪もない兵士の家族を一視同仁に憎むべきではないでしょう。彼らも哀れなのではないのでしょうか。

やはり、両国民は互いに民間交流しなければ両国の関係は改善できず、中国人の日本人への偏見も減らすことができません。

最近見た番組で、ある日本の建築家が中国人の家を改造するためにこの中国人と一緒に一日暮らしたいと申し出るシーンを見ました。最初は「家が狭いから不便だ。」などと言い訳して断っていた中国人は、この日本人の真摯な態度に負け、最後にはこの日本人を受け入れていました。

この貧乏な家族はわざわざ肉や魚を買い、建築家を心を込めてもてなしました。そして、奥さんは料理を作っている間、ずっとそばにいる建築家と話をしていました。

「中国語ではこれは『五花肉』といいます。」

「日本では『バラ肉』ですね。」

「『巴拉泥庫』（バラニク）？なにそれ。ワッハッハー。」

二人は具材の呼び方について話していました。炒めた肉の匂いが漂うと、部屋中の雰囲気も盛り上がってきました。

「中国では乾杯しないと兄弟になれないぞ。」食事の時、ご主人は一気にビールを飲み干しました。本気でこの日本人と親友になりたかったようです。

私は渡辺さんにこの番組のことを話し、現在の中国人と日本人の触れ合いの様子を自分の口から伝えたいです。少なくとも、自分ができるところをすることで、人々に両国関係の改善への希望を持って欲しいです。そして相手の国のことを認め合い、歴史の壁を乗り越え、皆が互いに助け合いながら生活できるように努力します。

「今日、教えたい中国語は『中国欢迎你』です。」

「どんな意味ですか？」

「出ていけの反対で、中国は日本人を歓迎するという意味ですよ。」

「中国欢迎我。」先ほどまでずっと雲に覆われていたような渡辺さんの顔に、やっと笑みがこぼれました。